随筆

父の本棚
（亡き父の思い出に）

公立久米島病院
村田　謙二

私は本を捨てられない。今や所有している本は2千冊を下るまい。医学関連の古くなった教科書や雑誌はどんどん捨てているにもかかわらず。本好きは父譲りであるが、捨てきれないのは、父と私の関係が大きく影響していると自己分析している。

小学生の頃コザ市に住んでいた。父に連れられて大都会の那覇に行くのが、子ども心にワクワクする出来事であった。しかし、数時間後には後悔に変わるのが常だった。父は所用を済ませると決まって本屋に入るのである。そこで1～2時間本を物色するのである。子どもは飽きっぽい。30分も同じ場所にいると、することが無くなって苦痛を覚える。おまけに、帰り際がまたいけない。父は本をまとめ買いするのだが、必ず値切るのである。古本屋ならともかく、定価の付いた本を安く、と迫る父の行為は、子ども心にも情けなく恥ずかしかった。ただ父の名誉のために述べておくと、当時ドルと円の換算率は360円＝1ドルであったが、本に関しては輸送料がかかるとして、300円＝1ドル換算であった。これでは本屋の儲け分が多かろう、値切る権利はある、父はそう考えていたに違いない。しかし、私が父の立場を理解できるようになったのは、高校生になって自分の小遣いで参考書を購入する頃になってからである。

父は終生一介の歯科開業医として過ごしたが、性格は学究肌で、仕事が終わり食事を済ませると、書斎に籠もり読書するのが日課であった。子ども達がテレビに興じるのは、全くの時間の無駄と考えていたらしく、「テレビばかり見ていないで勉強しなさい」と一喝するのが常だった。けれどもテレビのスイッチを切ってしまう程の雷親父ではなかった。

こんなエピソードがある。当時ドリフターズの「8時だよ全員集合」という超人気のお笑い番組があった。兄弟全員笑い転げながら見ていたものだが、ある時珍しく父も一緒に見て笑って楽しんだ。番組が終わって、父が発した質問に私達兄弟は唖然とした。「面白い番組だね。これは毎日やっているの？」

民放で、ゴールデンタイムの1時間番組ならスポンサーの数も半端ではなく、毎日提供出来るわけがない。舞台装置をみてもかなり大がかりだし、リハーサルもかなり必要だろうと思われる芸もある。そのぐらいは、社会の仕組みが未だ良く解っていない中学生でも思いつく理である。そんな浮き世離れした父であり、思春期と言うことも相まって、私は中学生にもなると父と余り会話をしなくなっていた。

しかし、父の本棚は良く利用した。父の蔵書は大別すると3種あった。一つのグループは英語関係。勉強のスタートが遅かったせいか、勉強法に関する本も多数あった。これは、私の受験勉強にもたいへん役だった。勉強はただがむしゃらにするのではなく、常に効率よい勉強法を意識しながら行うことが大切なのだと学んだ。二つめのグループはキリスト教に関する書籍。生涯酒もタバコも嗜まない敬虔なクリスチャンだった父が集めた書籍の大半は、かなり専門的な本が多く、私にはついて行けなかった。しかし遠藤周作や三浦綾子の小説は、私に大きな影響を与え、30代以降私は彼らの著作のほとんどを読破した。

それは、今の私の価値観や人生観に大きな影響を与えている。

3つ目のグループは、短歌や俳句に関する文系の書籍であった。父は学徒動員で出征する前は、本土の大学の文系学生であったと聞いている。私は中学、高校と文系科目が苦手で、自分は理系の人間と信じて医学部へ進学したが、今自分を見つめ直してみると、趣味や嗜好は明らかに文系である。これも父からのDNAを引き継いでいる。

父の本棚に入り浸っていた頃に、父の意外な面を発見したこともあった。数は少ないながら父の３大テーマにはおよそそぐわない種類の本を発見したのだ。一つは、特許で成功して金持ちになろうと言うような本、他の一つは南米移住で成功を目論む本だ。どれも言わば一攫千金をねらうような本だ。堅実、実直な性格の父が、その様な本を読んでいたのは意外であった。しかし、裏表紙を見て私なりに納得した。父は几帳面で、本の裏表紙には購入した日付と読了した日付を記入していた。それらの日付は、我が家がまだ経済的に苦しかった時代と重なっていた。７人もの息子を持つ父親として、将来の財政的不安が大きくのし掛かっていたに違いない。しかし、家族の前ではその様な焦りや不安を見せる父ではなかった。

私はこのようにして、父とは面と向かって会話はせずとも、父の蔵書を通して親子の会話をしていたようなものだ。父の本棚から多くを学んだ私は、娘達にも私の本棚から学んで欲しくて本が捨てられないのである。

娘が高校生になった頃私の本棚を眺めながら聞いた。「あきらときよし」ってどんな小説？と。ん！そんな小説買った覚えがない。私は本棚を、父に習ってジャンル別に整理している。みると歴史関係である。オイオイそれは、中国の「明と清」だよ。幾ら理系志望でも、それぐらいは常識で察してよ。文庫本サイズなので、勘違いされても仕方がないが、「いつの時代も父の想いは容易には子に伝わらない」と口には出せずにぼやいていた。

随筆

心と精神医療

一銀クリニック
城間　功旬

精神科の病院に勤務していた頃、神経症の患者さんから「精神科を受診するという悩みは、自分の病状の悩みと同じくらい大きい。」と聞かされ、「患者さんが気軽に受診できる診療所を開設したい。」と思い、3ヶ月後には、一銀通り近くで、精神科診療所を開設した。昭和63年7月の事で、当時は「精神療法」の点数が低く、「経営は成立たない。」と言われていたが、33歳と若く、「10年やってみて成り立たなければ、診療所を閉めて、また働きに出ればよい。」と考えていた。

開院すると神経症の患者さんが多く受診してきたが、これまで精神科の患者さんの診療が主だったため、神経症の患者さんの治療は、難しく感じた。まず初めに主に試みたのは「ロジャースの来談者中心療法」である。これは、患者さんの話を遮らずに話したいだけ話をしてもらい、医師は聞くことに徹するという療法である。かなり忍耐が要求された。疲れると、自分のイスにお地蔵さんを代わりに置いておきたい気持ちだった。患者さんの家族からは「診察室から出てきたときは、別人のように明るい顔になっている」と喜ばれたが、それは一時のカタルシス効果で（それも治療上大切ではあるが）帰宅後数日すると症状は元に戻ってしまうという例が多かった。本当の治癒に向かっているとは言い難いと感じていた。本当に困って、その後、森田療法、自律訓練療法など数多くの本を読み実践してみたが、やはり良くならない患者さんがいる。「こんなにたくさんの本を読んだのによくならない患者さんがいるのは何故だろう。」と、自問自答する日々が続いた。

2年ほどたったある日、ふと気づいた。「心とは何か？心そのものが何か？ということを自分が解っていない。」と。「精神医学をするものが心そのものを解っていないとは。」と気づくと「どうにか解決しなければいけない。」と居ても立ってもいられない気持ちだった。治療の未熟さもあり、暗く長いトンネルの中に居るようであった。

そんな時「心そのものが何か？」を真剣に追求しているといわれる「座禅」の事を知り、友人の父上に紹介してもらい、平成3年6月より、日曜座禅会に通い始めた。約10年間、自分としては、真剣に取り組んでみたが、「心」そのものを掴む事はできなかった。

その後も、暗く長いトンネルは続いているが、そのトンネルも4～5年前からは、ほんの少しずつであるが、明るくなったような気がする。ほんの少しだけ、以前より精神科の治療が良くなったことによるものだと思う。「心そのものが何か」を掴めたわけではない。なんとなくそのイメージが少し湧いた程度でしかない。大変僭越ながら私が思う「心」のイメージについて述べさせていただきたい。

心とは、雲や水や粘土のように、もともと形がなく、刺激を受けると様々な形に変わりうるもので、その変化してできた形自体は心そのものではない。刺激を受けると、臨機応変にどんな形にも変化するというのが「心の性質（特徴）」なのである。それは、雲が様々な形に変化するのと同じ事である。

視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚、の5つの入り口から情報が入ると思考に働き、その受け止め方で、プラスの思考になるとプラスの感情のスイッチが押されプラスの感情が出る。逆にマイナスの思考になると、マイナスの感情のスイッチが押されマイナスの感情が出る。このことにより心が「喜怒哀楽」という形をとっているのである。この「喜怒哀楽」にとらわれずに流していけば、心はまた元の形のない状態に戻っていくのである。

しかし、この事が解らずに、マイナス思考に「捕われ」て、スイッチが押され続けると、マ

イナス感情の形に心が留まり精神的エネルギーを消耗して、エネルギーレベルが低下し、不安、うつ状態、幻覚、妄想、等の発症のきっかけとなりうるのである。心の病の状態に陥いると、その心の形に留どまってしまい、まるで「病という部屋」の中でウロウロ、オロオロするばかりで、出口を探そうしても、なかなか出口が見つからない状態が続く。変化した心の形を元にもどすためには、病という部屋から出ていくためには、とらわれ続けている考えや行動を修正して初めて、出口が見つかり、そこから出てゆけるのである。心の病には「出口」があると思う。

医師は「あなたの病状からの出口は、この方向ですよ。」と教えてあげる必要があり、それが、治癒に向かってゆく事であると私は考えている。そのためには、患者さんがとらわれているマイナス思考を修正しマイナス感情にとらわれないように指導していくと、心は元の自然な形にもどり改善していくのであると、私は考えている。

心とは幽玄にして無形なもので、これという形は無く、どんな形にも成れるという性質で存在しているものである。どんな形にも成りうるものだから、マイナス思考、マイナス感情にとらわれ続けると、病という形もとりうる。だから、マイナス思考、マイナス感情にとらわれることなく流し、強い意志によって支え、理性でコントロールしてゆくべきものであると思う。当たり前に、「心とは、こういうものである。」という何かしらがあると思っていたが、これという形のあるものはみつけきれていない。しかし、心は無ではない。これという形をとらないだけで、いろんな形をとりうる存在として感じている。

古稀のドゥル（泥）ムターン（遊び）その2

宮城小児科医院
宮城　英雅

ろくろを回している時は親指と中指の或いは左右の中指が器の外と内側から微妙な圧力を加えて成型して行く。これまさに土壁を挟んで互いの思いを伝えようとする指と指との対話である。何故かベルリンの壁を思い浮かべた。土が厚い間は回転も速くて可いが、薄くなるとゆっくり回転させて指の動作も遅くしなければならない。

蹴ろくろと言うのがあり足で蹴ってろくろを回すのだが、どだい回転させるだけでも難しい上に、かがんで肘を太ももに固定して土をいじり、回転の速度を加減しながら蹴るなど筋肉が突っ張って痛くて不可能。歳を感じると同時に往時の作陶家の苦労が偲ばれた。

作品が乾いたら次ぎに削りと言う作業がある。ろくろを回しながらナイフで削るのだが力加減を誤ると台無しになる。マカイ（椀）の底にナイフを当てて回転させながら削って高台を作る。その為底は厚めに造っておかなければならないのだ。やり直しが効かないので緊張する作業だ。柔らかい粘土の時は感じなかったが乾燥すると表面がざらざらしている。それをやすりをかけて滑らかにする。掃除と言っていた。

これが済むとコップの外側に釉薬を塗る。焼成すると黒くなるそうだ。灰色の液体を内側と高台を除いて塗りつぶす。高台に塗ると焼いた時にくっついてしまう。その釉薬が乾燥したら模様を描くのだが良い図柄が描けない。狩猟時代の原始人の描いたような稚拙な絵になった。線ぼりした跡には削られた粉が浮いてくるが息で吹き飛ばす。刷毛で掃くとその部分の釉薬が薄くなり焼けむらが生じる。自分には絵心が無い事を否応無しに知らされた。H氏（職業不明）は鼻歌を謡いながら生地を削って魚を浮き彫りにしている。見るとスケッチをした紙片がそばに置かれている。作陶に対する心構えが違うと感心した。

マカイに音符の図柄を描いていると、若い女の先生に「音楽が好きなのですね。」と声をかけられた。賛辞ではなく、単なる確認の言葉に聞こえて振られたような寂しさが頭をかすめた。コップには葦の葉にトンボが止まった図柄を描いたが線彫りだけなので迫力がない。未経験者は焼き上がった時の想像が出来ないから悔しい。

平皿の底の中心部には模様を入れない。弱い所で割れてしまう事がある。角皿は底になる所はたたきつぶしてスポンジで滑らかにし縁の部分は直角に立ち上げる。底と壁の接する所はすき間が出来ないように接着し丁寧に塗り込まないと焼く時に割れたりする。また30センチ×10センチもの角皿は、土が乾く前には持ち上げる時に折れる事もあるので慎重さが求められる。これには松葉模様をちりばめた。ちなみに平皿はろくろで角皿は手びねりである。

又箸置きも3個作った。ひとつは子どもが横向きに寝ていて頬杖をつき足を組んだポーズ、トントンミー（とびはぜ）は焼き鳥用の串で目ん玉と口を開ける。三つ目は瓢箪でこれは素焼きにした。焼成すると焼き物は縮むらしい。

数週間を経ていよいよ焼成した作品ができ上がった。ずらっと並べられた作品群の中から自分の物を見つけ出す時のあの心のときめきは忘れられない。コップや椀の形は誰の作品も皆似

ていて形だけでは自分の作品を判別出来ない。どれもこれも素晴らしく見える。ということは自分の作品も（皆と伍しているな）と独り納得するのであった。

図柄を確認して自分の物を取り上げた時の感動たるや、産声をあげている我が子を見る母親の気持ちを彷彿させられる瞬間であった。良く出来たと褒めたい気持ちが駆け巡る。しばらく眺めたり撫でたりして感傷にふけっていたがやがて理性をとり戻してあら探しを始める。全体的に見て形は悪くない。しかし図柄が鮮明ではない。線が二重になったりしている。雰囲気もいまいち物足りない。他人の物を見せてもらいその素晴らしさに感動しそのアイデアを確りと胸に刻み込み次の糧とする。見劣りのする自分の作品に無理矢理及第点を上げて大事に持ち帰った。とても愛おしく感じたものだ。

家族は「初めてなのにこれだけの物が出来るの！」と賛辞を惜しまない。その言葉が次へのエネルギーになるのであった。

こうしていろいろな体験をさせて貰った頃はコースも終わりに近づいていて、狭い路地ではカエルの鳴き声が聞こえる４月を迎えていた。

この陶芸教室は週１回７時から９時迄で12回、費用は３万円なり。女性徒の１人は座間味から１泊の予定で通っているらしい。ヤマトゥンチュ（先進国民）が多いと言う事は彼らは異郷の琉球文化に対する関心が高いのでしょう。逆にシマンチュ（琉球先住民）にとっては当たり前になっていて鈍感になっている。

航空会社の生徒は単身赴任で寂しい生活を予想していたが、来て良かったとしみじみと話していた。

最終日はピザパーティーで締めくくった。教室のスタッフが陶芸用の窯でピザを焼いてくれた。焼き鳥や焼きそばなどいろいろな物が出された。僕は即席で覚えたカクテルを三種類振る舞った。トムコリンズとジントニックが大好評で女性が絶えず４、５人列を作って並んでいた。お蔭で自分は飲めない食べられないの状況であったが、可愛い講師がピザを持って来て「カクテルがとても美味しい」と言ってくれた。嬉しくて胸が熱くなる。飲んだ事の無いご婦人方も美味しいと言っていたが１時間後には、ハイテンションになっていた。

「まあ、先生もコースに参加してらしたの。一言声をかけて下されば良かったのに。」と教室の主催者であるＫ女史が恨めしそうに言った。実はこの方こそ欠陥品のカラカラーをそれとは知らずに売ってしまい、それがきっかけでこの陶芸教室に通う事になり、お蔭で楽しく少しほろ苦く、甘酸っぱい、そして意義深い三ヶ月を体験出来た感謝すべき方である。

しばらく休んでデザインの勉強をしてから再度作陶に挑戦しようと決めていた。帰る時、２人の女の先生が薄暗い狭い路地を表通りまで送ってくれた。その際、その旨決意表明すると可愛い先生は「きっとですよ」と気のせいか僕の目の奥をじっと見て言った。（ボカー、し・あ・わ・せ・だ。）

その機会は５ヶ月後に訪れる事になるがその時は毛頭予想だにしていなかった。それについては稿を改めて禿筆を曝すつもりである。

6回目の寅年 あれやこれや その2

沖縄第一病院
名渡山　愛雄

2回目の寅年（昭和37年）

大学卒業後、東京のJRの秋葉原と浅草橋のほぼ中間にある三井厚生病院（現三井記念病院）でインターンを終え耳鼻咽喉科に入る。上野に近い下町育ちの親友に誘われてこの病院へ16年居着くことになった。

昭和41年2月、外科にいた大学の先輩から台東区民スキー教室の救護ドクター（Dr.）として参加してほしいという。私には突飛な依頼である。沖縄育ちの雪を知らないものに勤まるのかどうかと躊躇したが先輩は何も心配することはないから大丈夫という。普通スキーDr.は外科か、または整形外科が主であり耳鼻科では珍しいと思われたが、これも運命とあきらめた。私の仕事は捻挫や外傷などに対処すること。医療器具は準備されてあっても不安を抱えつつ土曜日の夜行バスで出発。連休を利用した2泊3日の行程。場所は長野県霧ヶ峰高原スキー場。スロープは緩やかで初心者向けのコースだという。ただ待機しているのもいやだし、初心者に交じって救護班の腕章を付け、スキー講習をこっそり受ける。最初はボーゲンといって弓型に制動しながら滑ることから始める訳であるが、それでも初心者同士はぶつかったり、転倒して雪だるまのようになる。そのうち互いに打ち解けてゆくのがわかる。私もスキーのスピードが出ると恐怖のためへっぴり腰になると転倒しやすく、全身を打撲することもある。でもDr.であるから弱みを見せられず頑張る。次に斜滑降、回転、直滑降と進むが基本はやはりボーゲンでスキーを制動できるように滑ると楽しくなってくる。時々Dr.と呼び掛けられると一瞬、怪我人でも出たのかとドキッとさせられるがインストラクター（スキー指導員）の指導が良く、危惧していたトラブルも少なかった。

東京に戻るバスの中では歌を順次歌ったり楽しんでいたが突然イギリスのBOAC航空機や日本のANA機が相次いで羽田沖に墜落のニュースにバス内の空気は一変したことを覚えている。結局先の先輩も多忙のため、君に2シーズンまかせると云われスキーの虜となった。少し上達したのでレンタルスキーに飽き足らずスキー一式を揃えた。日曜日には一人で新潟県の中里スキー場で日帰りスキーを楽しんだ。旧国鉄上野駅から始発電車に乗り旧国鉄越後中里駅で降りればスキー場は目前にあり、とても便利だ。ときには院内のスキー愛好者を募って八方尾根、菅平、それから志賀高原から万座スキー場をめざすスキーコースにも挑戦した。いずれも骨折はしない自信はついたようだ。骨折して同僚に迷惑はかけないよう注意したのは云うまでもない。

一方週1日の研修日をもらい耳小骨筋反射の研究のため当時の東京教育大学（現筑波大学）聴覚研究施設國府台分校（千葉県市川市）の星龍雄先生（現筑波大学名誉教授）の指導を受ける。折りしも昭和39年から同40年にかけて風疹が沖縄全島に大流行。眼疾患、心疾患などを含む難聴児が600名に及び（その内難聴児400名）社会問題となる。日本復帰前でありこの國府台分校が、当時の琉球政府（厚生局）と日本政府（厚生省）の難聴児教育の研修施設として選ばれ、沖縄から聾学校や各地の難聴学級を担当している大勢の先生方が研修にみえていた。

この研修指導の中心は星先生で、沖縄聴覚障害児福祉センター（当時首里石嶺町）の開所にあたり、総理府から技術指導として私が昭和46年1月～3月まで派遣されることになった。短期間であったが風疹難聴児の聴力検査に携わった。それ以前に星先生やその他の先生方は日本政府の検診団として沖縄に来

られ、風疹による難聴児を早期に見つけ、補聴器を装着して教育することが最善の方法であった。市川で研修を受けた先生方が沖縄に戻り、実際にその子供達と母親との涙ぐましい三位一体の教育現場をみることになった。小柳ルミ子が歌っている「瀬戸の花嫁」や「わたしの城下町」を聞くと当時のことが走馬燈のように想い出される。

研修の先生の中にはかつて対馬丸で疎開児童として九死に一生の思いで生還されたＧ先生がおられた。先生は56年前の昨年、鹿児島の悪石島での慰霊祭に出席されたが、その時私は浦添てだこホールで合唱組曲「海のトランペット」－対馬丸の子供たち－（池辺晋一郎作曲、指揮）を合唱団の一員として参加し鎮魂を共有できた。

３回目の寅年（昭和49年）

長男が３歳になり、更に家族が増えそうなので思い切って一軒家を求めて千葉市のはずれの新興タウンに引っ越した。近くに田圃や大きな公園があり、それは空気は美味しく感じられはしたが、通勤時間が電車とバスを乗り継いで１時間以上、時間に追われる毎日が６年続いた。

昭和55年４月当時、与儀にあった琉球大学保健学部耳鼻咽喉科の野田寛助教授（現同医学部名誉教授）の薦めで那覇市立病院に赴任。慢性中耳炎ことに真珠腫性中耳炎の手術治療を中心に診療に従事する。

４回目の寅年（昭和61年）

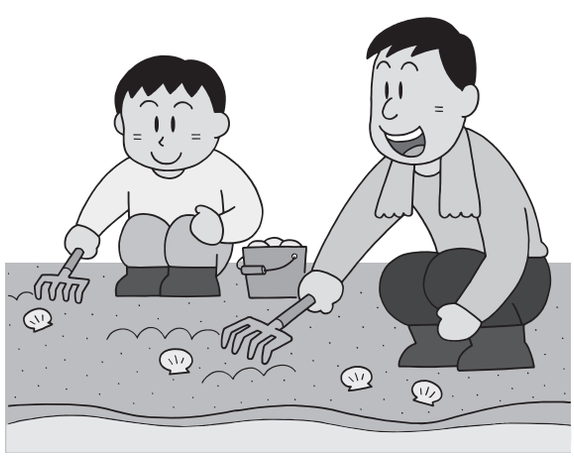
多忙な日を送っていたが２年後の昭和63年外科の川野幸志先生（現外科部長）と趣味の話になり「沖縄にもスキー連盟があるんですよ」と事も無げに云われた。自分には沖縄に帰ればスキーは出来ないものと決めてかかっていただけに驚きの声を上げる程嬉しかった。先生は沖縄県スキー連盟の会員であった。そして大学時代から滑っていたDr.が市立病院にあと２名いるそうだ。川野先生を中心に内科の當間茂樹先生（現とうま内科）、整形外科の山里二朗先生（現はんびい整形外科）私４名が集まり沖縄県スキー連盟主催のスキーツアー（４泊５日）に参加することが決まった。沖縄県民体育大会冬季大会スキー競技会と国民体育大会冬季大会スキー競技会県予選が毎年行われており、私は初めてスキー競技を見た。14、５年ぶりである。北海道千歳空港から支笏湖を右に見ながら西に向い倶知安を通ってニセコに到着。約３時間のバス旅行である。私を除いて３名のDr.の技量はすでに１級であり私はスキー講習を受けることにした。あたかも自転車に何10年ぶりに乗るようなもので、最初はおぼつかなかったが、徐々にスキーに慣れ技量テスト（バッチテスト）３級に合格。その後連続８シーズンのツアーに参加した。

平成４年（1992年）には小学校４年の次男連れで参加。彼は技量テスト５級から受けてその日のうちに３級に合格しゴキゲンだった。私は平成５年には同テストで２級に合格。その頃にはわたしもゴンドラでアンヌプリ山に行き約1,000mの滑降コースを約10回挑んだ。頂上はpowder snowの舞う銀世界であり、晴れた日には蝦夷富士と云われる羊蹄山を左手に眺めながら一気に滑るスリルは何ともいえない至福の時間を味わう。外気温は－５℃であるが体は感激で火照っている。夜はニセコ温泉で体を休める。このスリルを忘れられず平成20年にも参加し第60回沖縄県民体育大会スキー競技ジャイアントスラローム男子Ａの第１位になった。（参加者は少なかったが）

沖縄県スキー連盟勝山直文大会委員長（豊見城中央病院 放射線科）より賞状を受け感激した。スポーツにはまるっきり弱い自分が雪の急斜面をスキーで滑れるなんて不思議に思う。80歳までスキーがやれたらいいなと思っている。三浦雄一郎さんのお父さんのように。

5回目の寅年（平成10年）

還暦の年は母の喘息と看病で慌ただしかった。平成15年に定年退職を迎える。血筋は争われないのか、生来アレルギー体質を受け継いだため那覇市立病院の多くの先生はじめその他の職員の方々に公私共にお世話になった。とりとめもない自分史の羅列のようになってしまった。父の情報が少ないので父について親戚等に聞いたりしているが、もうその年代の方も少なくなっている。

退職後は新垣哲先生の西武門病院で4年間、現在宮城信雄県医師会長の病院で働かせて頂き感謝するとともに、今日まで学んだことを還元できたら幸いである。

高校同期の友人Tと付き合っていると、アメリカの作詩家Samuel Ullmannの「青春」という詩の中に「青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の持ち方を言うのである」という言葉を思い出す。彼は学生時代からスポーツ万能で現在もゴルフの他にオペラに出たり、宮古島からわざわざ沖縄まで来てコーラスを楽しむなど青春を謳歌している。今では私もコーラスを楽しんでいる。いつまでも青春の途上にいたいものである。